

石井鶴三関連資料の整理について

笹本 正治（信州大学附属図書館長）

はじめに

「石井鶴三の作品及び関連資料」は、寄贈代理人の岩部定男氏から2010年4月、正式に信州大学へ寄贈された。寄贈された資料の本来の所有者である石井鶴三（1887～1973）は東京芸術大学彫刻科の教授として、また中里介石の『大菩薩峠』や吉川英治の『宮本武蔵』の挿絵でも有名な彫刻家、画家で、教育者としても大きな足跡を残した人物である。同時に信州大学が所在する長野県において、鶴三は上田で彫塑講習の講師を永年勤めるなど、美術教育に大きな影響力を持った。日本の近代文化のみならず、長野県的美術教育を知る上でも大変に重要な人物だといえよう。

信州大学としては寄贈を受けた資料をいかに整理し、いかに活用していくかが今後の課題である。寄贈された資料の管理及び整理などは信州大学附属図書館が行っている。そこで、私たちはいかなる意図と方針によって、整理研究を行おうとしているかについて、個人的な関心を含めてお示ししたい。

1. 寄贈を受けた経緯

石井鶴三の作品が信州大学に寄贈された経緯の詳細については、岩部定男氏の論考があるので、詳細についてはそちらに譲りたい。ここでは、私の立場から寄贈を受け入れるまでの経緯を確認しておく。

2006年に元中央公論新社の編集者であった木村史彦氏から電話があり、「私の知り合いの岩部さんという方が、石井鶴三の作品を松本市に寄贈しようとして、大変苦労されている。先生は松本市に住んでいるので、何かお手伝いをして欲しい」旨が伝えられた。木村氏にはかつて大きなご迷惑をかけたのでこれは何とかしなければと、すぐに岩部氏に連絡を取った。一方、私は石井鶴三についての知識を全く持っていなかったため、どのような人かをチェックした。

間もなく岩部氏に松本市美術館でお会いした。その場では、鶴三の美術作品以外のものについて松本市美術館で受け取りを拒否する可能性が高く、そうなった場合多くの鶴三関係資料が行き場を失うこと、残りは一括で公的機関に預けたいこと、近代の芸術家の関連遺品で戦災を乗り越えてこれだけの量が残っていること自体が珍しくその価値は大変大きいこと、できたら信州大学が受け入れるように取りはかってくれないか、などといった内容を伝えられた。

私としては残されてきた資料が単なる芸術家の枠を超えて大変大きい価値を持つことを認識し、何とか協力したいと思った。とりわけ鶴三が長野県と縁の深いこと、初期から日本山岳会の会員であったことなどを理由にすれば、大学を説得できる可能性もあると推測した。同時に鶴三作品の多くが松本市美術館に寄贈されているので、今後の研究展開をはかるためにも直線距離で約3.5キロメートルしか離れていない松本のキャンパスが最適だろうと考えた。また、上田市大手の上小教育会館内に石井鶴三美

術資料室があり、同じ長野県内ということからも信州大学で受け入れるのが最善であると思った。

歴史学を専攻している私の立場からすると、残されたすべての資料は鶴三個人と彼が生きた時代を理解するために有機的につながるはずである。将来の研究のためには、伝わってきたすべての資料を残すことが緊急課題であり、旧国立大学として等しく国民にとって財産となりうる資料を残すお手伝いをすべきだと考えた。ただし、この時にはまだ松本市美術館の動向がはっきりしていないので、完全に美術館が受け入れないという態度を表明したら助けて欲しいという、下打ち合わせだった。

その後、何度か岩部氏と連絡を取った。2009年5月頃だったと思うが、「正式に松本市美術館は受け入れないと表明がされたので、信州大学でなんとか受け入れてくれないか」と相談された。私からは「仮に信州大学で受け入れが可能になった場合でも、本学には美術品の収蔵施設がないので、松本市美術館のような良い環境での収蔵ができない」と説明した。岩部氏からは「既に松本市美術館に搬入されているものを動かさねばならず、緊急を要し、なおかつ相続税との関連から公共機関に一括という条件が付いているので、受け入れていただけたらそれだけで大変ありがたい」との返事を得た。

当然ながら、一介の教員に過ぎない私には受贈を決めることができない。本や手紙などが資料の大半を占めると聞いたので、受け入れ先としては信州大学附属図書館が最適だと判断して、当時の野村彰夫図書館長のもとへ相談に行った。図書館長は「副館長に話をするように」とのことであった。全体的に当時の図書館は消極的に感じられたので、小宮山淳学長のところへ直接おもむき、美術作品を除いた鶴三の関係資料が行き場を失っており、信州大学に寄贈したいとの意向があること、彼が信州と極めて深い縁のある芸術家であること、本学の特徴として山岳科学総合研究所があるが、鶴三関連の資料の中には山に関わる資料があることを強調し、「何とか受け入れていただけないでしょうか」とお願いした。小宮山学長は資料の重要性を理解され、「信州大学として受け入れましょう」と決断してくれた。

2009年10月1日より学長が交代し、新たに山沢清人先生が学長になった。私も信州大学副学長として広報と情報担当、同時に附属図書館長を兼ねるようにと山沢学長から任命された。図書館長になったことで、山沢学長にこれまでの経緯をお話し、鶴三関係資料の寄贈を受けることを改めて了承していただいた。学長は松本市美術館で行われた「石井鶴三展」も観に行き、これほどの人の関係資料を本当に寄贈していただけるのかと、非常に驚かれた。

私は12月9日に美術館で岩部氏に会い、21日に図書館が寄贈受け入れに関する覚書を作成し、26日に再び私が岩部氏と話をし、最終的な詰めを行った。こうして準備は進み、2010年2月1日に岩部氏が図書館を訪れるとともに山沢学長と初めて面談し、信州大学が鶴三関係資料を受け入れることが確定した。また、学長からは資料寄贈を受け入れた場合、図書館がその整理などをするようにとの指示を受けた。ところが、松本にある附属図書館を内包する松本合同図書館（現中央図書館）には当面これを収容し、整理する場所がないため、財務部と相談し、たまたま空いていた本部棟の一室を借りることになった。私は日常的に本部棟にある広報室で仕事をしているので、大変有り難い本部の対応であった。

また、整理に協力していただく教員として、人文学部から次の3人を選出した。日本近・現代文学を専攻する松本和也准教授（資料の中に多くの文学者からの手紙があり、鶴三の小説挿絵の意義も大きいと考え、この分野を担当していただく）、新古典主義・彫刻史・イタリア近現代美術・日本近現代美

術について研究している金井直准教授（なんといっても鶴三は芸術家であり、美術史的に見ていく必要がある。とりわけ彫刻における意義も大きいので、この分野を担当していただく）、日本現代史を専攻し長野県をフィールドとした戦後の社会史を研究している大串潤児准教授（鶴三を社会全体の中で位置づける必要があるの、それを担当していただく）の3名である。これら若手の有能な研究者によって今後資料がどのように料理されるか楽しみである。

松本市美術館からの資料移送は3月9日から11日にかけて行われたが、私も美術館へ赴いて内容などを確認した。こうして、鶴三関係資料が寄贈されたが、その整理のための予算的な裏付けは何もなかったの、3月18日には整理費を学長裁量経費で出していただくための打ち合わせを行った。その後、遺族のもとに最後まであった資料が、東京の高田馬場から3月30日に大学へ移送された。

同月31日には資料を搬入するに当たっての最終打ち合わせを図書館で行った。そして松本市美術館から搬入した資料を、同日に岩部氏が附属図書館に来て確認をした。この間、附属図書館職員は自ら車を運転して大学に運び込み、それこそ獅子奮迅の働きであった。ちなみに、2010年3月段階の仮目録によれば、約2万7千点の資料点数で、実に膨大な資料群であった。

その上で、4月7日の山沢学長と岩部氏による覚書の調印になった。

4月22日に第1回の資料整理の打ち合わせを行い、現状を確認し、今後の方針について決めた。5月12日から14日にかけて第1回の資料整理作業が各先生によって行われ、その状況は信大テレビが収録した。番組は信州大学のホームページの信州大学動画チャンネルで配信されているので、ご覧いただきたい。（【ドキュメント】日本美術の先駆者 石井鶴三の実像に迫る、【ドキュメント】日本美術の先駆者 石井鶴三の実像に迫る_第2部）また、5月25日には404万7千円の学長裁量経費がつき、整理のための予算も準備された。

こうして、附属図書館が中心となつての整理作業の幕が切って落とされたのである。

2. 資料受け入れの理由

信州大学が鶴三関係資料を受け入れることは、今後ともその保存のための場所を用意し、同時に資料を整理し、閲覧に供するだけの準備をしていかなばならないという、費用と人的負担を負うことを意味する。では、なぜ信州大学でなければいけないのか。主として2つの理由がある。

(1) 山との関係

信州大学は現在、重点5領域を設けて、世界水準の研究を実現しようとしている。その中に「山岳科学の研究領域」がある。ホームページでも「信州大学山岳科学総合研究所は、自然と人間との共生を追求する新たな学問領域『山岳科学』の創造を推進します」と訴えている。信州大学附属図書館には小谷コレクションが所蔵されているが、これは平成14年(2002)度に小谷隆一氏より寄贈された国内有数の山岳関係コレクションである。登山と山に関する貴重な国内外の資料が約8千点集められており、そのうち江戸時代から明治時代にかけての和古書・古地図については、附属図書館が全文を電子化して

ホームページで公開している（近世日本山岳関係データベース）。

信州大学にとって山を対象とする研究は最重点項目の一つであり、山に関わる資料の収集は重要な案件である。その点、鶴三は山から大きな影響を受けており、作品にも山を素材とするものが多い。したがって、鶴三関係資料を本学が蔵することは近代人の山に対する意識を探る素材になる。とりわけ、芸術家が山をどのように意識し、表現しているかは、興味深い視点である。

以下、鶴三と山の関わり的一端を紹介しておく。

鶴三は 1906 年（明治 39）、20 歳の時に山本鼎と浅間山に登り、雲海の上に雪を頂いた日本アルプスに心を打たれ、その後毎年山に登るようになった。1911 年（明治 44）には山で得た感動を「荒川嶽」と題して石膏で作し、第 5 回文展に出品し入選、褒状を得たが、その後も山にかかわる作品を多く作っている。

1919 年（大正 8）には 33 才で日本山岳会会員となった。日本山岳会は 1905 年（明治 38）の創立なので、比較的早い時期からの会員といえ、いかに彼が山に関心を持っていたかがわかる。1920 年（大正 9）の第 1 回自由画展には「団扇五題」（日本アルプススケッチ）と題して作品を出した。1936 年（昭和 11）には足立源一郎、茨木猪之吉、中村清太郎等と日本山岳画協会を創立した。

このように、彼は山に関係した美術家として注目すべき人物である。鶴三が残した資料の中から近代人の山意識を探ることも可能である。山岳にかかわる研究を推進している信州大学がこれらの資料を入手すべき理由の一つはここにある。

（2）信州の美術教育との関係

信州大学はその目標の一つに地域貢献を挙げ、「信州の自然環境の保全、歴史と文化・伝統の継承・発展、人々の教育・福祉の向上と産業発展の具体的課題に貢献するため、大学を人々に開放し関連各界との緊密な連携・協力を進めます」と決意している。この目標からすると、信州に関わる事柄、とりわけ教育の実態を明らかにすることは本学として意義がある。そこで、信州と深い縁を持ち、地域の美術教育に努めた鶴三の動きを明らかにすることが大切になってくる。これが、今回の資料を受け入れた第 2 の理由である。

前述のように鶴三は 1906 年（明治 39）に山本鼎と浅間山に登っているが、その関係から信州で美術指導を行った。1924 年（大正 13）8 月には、倉田白羊の推薦で上田彫塑講習会の講師となり、1970 年（昭和 45）まで毎夏指導に当たった。東信（長野県の東側）だけでなく、南信（長野県の南側）でも同じ活動をし、1928 年（昭和 3）には伊那の彫塑講習会の講師となり、1932 年（昭和 7）まで続けた。1929 年（昭和 4）10 月には上小彫塑研究会作品展を開いており、鶴三の指導は着実に成果をあげていた。

1937 年（昭和 12）には長野美術研究会の絵画講習会講師となり、1958 年（昭和 33）まで勤めた。木曾谷でも 1942 年（昭和 17）11 月に福島国民学校で木曾学童図画展講師の役割を果たし、上松国民学校では「美について」を講演した。木曾との関係は深く、1945 年（昭和 20）11 月には木曾教育会で「芸

術について」の題で講演している。

1949年（昭和24）8月には木曾教育会の支援で「木曾の檜で木曾の地で文豪島崎藤村先生像制作」が始まった。以後、数年にわたり随時木曾にやってきて制作を続けた。11月13日には木曾教育会で「たんだ一本の線について」と題する講演をしている。

1950年（昭和25）12月には木曾教育会機関誌『木曾教育』創刊にあたり、表紙画と題字を書いた。1951年（昭和26）6月には開田村の山下一平氏宅で「木曾馬」を制作した。同年の7月から8月にかけて木曾の奈良井（現塩尻市）で「藤村先生像」第二作（木彫り）の制作に着手した。1952年（昭和27）12月8日・9日には木曾教育会の図画工作認定講習会の講師を務めた。

1964年（昭和39）11月16日には木曾教育会で「たくましい日本の造形力」を講演し、木曾教育会郷土館（現木曾町）の額を揮毫した。その翌日には島崎藤村の『夜明け前』挿絵執筆の参考にと、中津川（現岐阜県中津川市）から馬籠峠を歩いた。1965年（昭和40）11月には馬籠（現岐阜県中津川市）で「島崎楠雄氏像」を制作した。

東信での活動も続いており、1949年（昭和24）7月10日には上田で彫塑研究会25年記念展のため「彫刻性」を講演した。1954年（昭和29）9月には上小彫塑研究会30年記念展のため「彫刻の話」を講演し、『上小教育』の表紙画と題字を書いた。1959年（昭和34）9月には上田で上小彫塑研究会35年記念として「彫刻について」を講演している。1964年（昭和39）8月には上田彫塑講習会で「外のデッサン」について話し、9月11日には長野小学校長研究協議会上田大会で「鷺湖と乾也」を講演している。さらに10月には上小教育会80周年記念講演で「私の彫刻修行」を講演した。

1954年（昭和29）12月には東京芸術大学石井教室編で『彫刻家荻原碌山』を信濃教育会より刊行した。長野県でもっとも有名な彫刻家は荻原守衛（碌山）であるが、彼を高く評価し、近代彫刻史の中に位置づけたのが鶴三だったのである。このことだけでも長野県にとって鶴三は記憶されねばならない。

さらに、1961年（昭和36）11月6日には松本の本郷小学校で「彫刻の話」を講演している。

こうした鶴三の長野県美術育成のための活動は今後詳細に追求し、その影響について検証していかねばなるまい。一方で驚嘆すべきは鶴三のような著名人を招き、講演させ、それを受け入れている地域の文化水準の高さである。信州の教育の在り方を考えるに際しても、鶴三の活動とそれを受容する動きは研究すべきテーマとなろう。

信州大学に寄贈された資料の中には長野県人から鶴三に宛てた手紙などが多数ある。これらを分析することにより、確実に長野県の美術教育史の一端が見えてくるはずである。

ところで、彼の信州における美術教育を理解するための一つの鍵が、山本鼎（1882年〔明治15〕～1946年〔昭和21〕）との関係であろう。鼎は愛知県岡崎市出身で、美術の大衆化、民衆芸術運動に身を投じた版画家、洋画家、教育者として知られている。1900年（明治33）に父が小県郡神川村大屋（現上田市）に医院を開業したのにもない、一家は長野県へ移住してきた。

鼎は1902年（明治35）に東京美術学校西洋画科選科へ入学し、1904年（明治37）に木版二色刷の「漁夫」を発表したが、後刷りではあるがこの作品もこの度寄贈を受けた資料にも入っている。鶴三の兄で、松本市と関係の深い石井柏亭はこの絵を「刀画」と名づけている。

鶴三は1905年（明治38）に東京美術学校に入学し、翌年には鼎の紹介により『東京パック』の記者となり漫画を描いた。また、この年の夏には鼎とともに信州を旅した。鼎は1907年（明治40）に石井柏亭、森田恒友らと『方寸』誌を創刊しており、石井兄弟と深い関係にあった。鼎は1912年（大正元）に神戸港からフランスへ留学したが、その間の1914年（大正3）に島崎藤村と親交を結んだ。彼が帰国したのは1916年（大正5）で、帰国途中のモスクワにて児童想像美術展と農村工芸品展示所を観た。

鼎は帰国した翌1917年（大正6）、上田で金井正らと児童の美術教育の改革について話し合った。この年、鼎は北原白秋の妹である家子と結婚し、東京市外日暮里に新居を構えた。1918年（大正7）には戸張弧雁、寺崎武男らと日本創作版画協会を設立して会長となった。同年、長野県小県郡神川村の神川小学校で「児童自由画の奨励」と題して講演している。翌1919年（大正8）には彼が執筆した「日本農民美術建業の趣意書」を神川村に配布し、農民美術練習所を神川小学校に開講している。

こうした山本鼎の活動の中で、鶴三も信州の美術教育と深い関係を持つことになったのである。その意味では、近代の地域美術運動の実態も石井鶴三と山本鼎のつながりの中から見えてくるものがある。

さらにもう一点、鶴三の兄である石井柏亭（本名・満吉）についても触れておかなければならない。本学附属図書館が所蔵している旧制松本高等学校旧蔵絵画の中に、石井柏亭の「鞆の津」という水彩画がある。柏亭は1882年（明治15）3月28日に東京で日本画家鼎湖の長男として生まれた。1898年（明治31）に浅井忠に入門し、1902年（明治35）には太平洋画会会員となった。1904年（明治37）に東京美術学校に入学したが、翌年退学した。1907年（明治40）には山本鼎らと『方寸』を創刊し、この年信州に初めて訪れた。1914年（大正3）に同志と二科会を創立し、翌年には『中央美術』創刊に関与した。1935年（昭和10）に帝国美術院会員となり、1936年（昭和11）には同志と一水会を創設した。戦後は信州大学教育学部講師も務めた。1958年（昭和33）12月29日に東京で没した。1945年（昭和20）3月、浅間温泉（現松本市）に疎開した縁で、松本では鶴三以上によく知られている。浅間温泉には石井柏亭の歌碑も建てられているほどである。松本市美術館に「信濃乙女」、日本民俗資料館に「松本城」といった作品がある。また、長野県信濃美術館に「野尻湖」がある。

こうして本学にも、そして長野県にも大変縁の深い兄柏亭を明らかにし、柏亭の画業などの実態に迫るためにも、本資料は重要である。

3. 近代の芸術家を明らかにする

周知のように鶴三は彫刻家、画家、版画家など芸術家として幾多の側面を持っている。その活動実態を探ること自体が、近代の芸術家の動きを知る大きな手がかりになる。しかもこれだけ多面的な側面を持つ彼の活動は、単に美術作品を見ただけではわからない。本学に寄贈された資料には彼の使っていた画材から始まって作品にいたるまで、あらゆるものが含まれている。以下では、この資料が持つ美術史的価値について寸言を加えておこう。

鶴三の父の石井重賢（1848年〔嘉永元〕3月～1897年〔明治30年〕11月2日）は、印刷局に勤務し、

画家として鼎湖の号を持っていた人物である。彼は谷文晁の門人であった鈴木鷺湖の次男として江戸で生まれ、幼時より父に絵を学んでいた。1859年（安政6年）に仙台藩士の造船家三浦乾也の養子となり、1863年（文久3）に石井家を継いだ。1870年（明治3）には大蔵省に出仕し、1874年（明治7）に紙幣寮に入って銅版画、石版画を習得した。明治初期の銅版画家として知られる松田緑山の開業にも参加して、石版画の指導にあたった。1877年（明治10）には中丸精十郎に洋画を学び、1889年（明治22）の明治美術会創立に参加した。さらに、川上冬崖や国沢新九郎にも師事していた。1897年（明治30）には日本南画会の結成にも参加するなど、日本画、洋画の双方にわたって幅広い活動を行った。

鼎湖の実父は画家の鈴木鷺湖（1816年〔文化13〕～1870年〔明治3〕4月22日）で、江戸時代末期に下総国千葉郡豊富村（現千葉県船橋市金堀町）に生まれた。江戸に出て谷文晁、相沢石湖に学んだ。近世と近代をつなぐ画家の一人として重要である。

このように、鈴木・石井家では鷺湖から柏亭・鶴三に至るまで、3代にわたって画業を続けていたのである。資料の中には鷺湖や鼎湖の粉本なども多数含まれており、両人の画業の実態に迫ることができる。同時に、近世末から近代・現代にかけて画業が継承されてきたのはなぜか、そこでは何が受け継がれてきたかなど、美術史的に興味深い問題を解く鍵となる資料も含まれていると考えられる。

おわりに

既に信州の美術教育で鶴三が果たした役割について触れたが、それは彼の教育の一端に過ぎない。東京芸大教授としての彼の活動がどのようなものであったのか、彼の教育理念がいかなるものであったのか、本資料をきちんと読み解くことによって見えてくる。それはそのまま、個人としての石井鶴三の思想を探ることにもつながるはずである。

私が信州大学で鶴三関係資料を引き受けるべきだと考えたのは、彼を通じて近代の文化人の活動や思想が見えてくると判断したことによる。彼の水彩の作品「縊死者」（東京芸術大学所蔵）は1915年（大正4）に描かれた。また、同年には「行路病者」（同）も描いている。ともに社会の実情を描いた作品である。ここには時代の中に生き、弱者に同情を寄せる鶴三の姿がよく現れている。

ややもすれば、芸術家は芸術家としてのみ評価されがちであるが、どんな人間もある時代の中に生きている。近代史の中に鶴三を一人の人間として位置づけることによって、近代の実態が浮かび上がってくるであろう。私は歴史学者であるが、信州大学が鶴三関係資料を入手したことにより、従来の芸術家研究に対して新たな新風を吹き込むことを確信している。

従来芸術家の研究はその作品を通じて論議されることがほとんどであったが、作品は一つの時代の中で生まれるものであり、個人の生い立ちや接触した人間関係などに規定される。そうした意味において芸術を真に理解するためには、作者がいかにして思想を打ち立て、どのような目でものを見ていたか、どのような人たちとつながって、どのようなことを吸収しながら成長していったのかなど、幅広い範囲から多角的に見直す必要がある。

既に記したように、鶴三関係資料は実に多面的な価値を持っている。単なる芸術家を超えて、近代を

理解する重要なツールになる。これが信州大学に寄贈されたことは、大学として大変にありがたいことである。

しかしながら、寄贈されたが故に整理、保存、管理といった責任はきわめて重い。信州大学は未来のためにこれを利用できるように、まずはきちんと整理し、閲覧態勢を整え、よりよい形で時代につなげていくための保存をすることが大事だと考える。当面、鷺湖や鼎湖の粉本など、開くだけでも破損が進む恐れのあるものについては、できるだけ現状のままとし、少しでも破損を食い止める手立てを考え、予算が付いた段階で手を付けていくしかない。また、スケッチ帳や作品など酸性紙の管理も大変である。まずはきちんとリスト化をしていくことが肝要であるが、資金の問題もあり、早急には進まないのが現状である。それでも信州大学附属図書館は着実にこれをこなしていく決意である。

同時に、記述したように多くの課題を解くための素材となる資料なので、その研究にも着手しなければならない。幸い信州大学は総合大学である。信州大学の教員たちによって、このような資料の使い方もできるというモデルケースが発表されることを期待する。

ちなみに、私の副学長としての役割の一つが広報である。信州大学のホームページ上の動画チャンネルで2回石井鶴三を取り上げた。また、本学が発行している『信大NOW』68号（2011年3月25日発行）では、トップ特集に鶴三を、「資料は語る山を愛し、人を愛し、芸術を愛し抜いた石井鶴三の日常」を4頁にわたって取り上げた。『信大NOW』は大学ホームページ上から閲覧できるようになっているので、ぜひご覧いただきたい。このように、鶴三関係資料が信州大学に収蔵されており、それが目下整理中であることを世間に周知させることも、今後の大きな課題の一つといえよう。

付記

信州大学では毎週、週初めに全教職員に向けて「週刊信大」というメールマガジンを配信している。私はその編集長という立場を担っており、その冒頭言で石井鶴三についても書いてきた。参考までにその文を一部修正して掲げ、教職員に訴えたことを確認しておきたい。

週刊信大臨時号（2010年4月8日）冒頭言

○石井鶴三さんの作品を観ませんか

石井鶴三（1887～1973年）は、戦前から戦後を通じて、日本を代表する芸術家として知られ、彫刻、版画、挿絵画、油彩画、水彩画等多岐にわたる作品を残しました。

本日（7日）石井鶴三の法定相続人代理人である岩部定男氏と学長との間で、石井鶴三関連資料の寄贈に関する覚書が締結され、正式に信大が寄贈を受けました。

記者会見用に受贈した資料の一部（ほんの一部ですが）を本部5階第2会議室に展示しました。これを観た人たちの間から、これだけのお宝は他の人にも観せたいと声が上がりました。せっかくの機会なので、明日（8日）11時半から2時までの時間限定で、お観せいたします。

すばらしい母親のブロンズ、木彫作品、新聞連載された中里介山の『大菩薩峠』の挿絵下描きなどを用意しました。鶴三が出した版画の年賀状もあります。

○横山大観の手紙、高村光太郎のはがきも

石井鶴三といえば吉川英治の『宮本武蔵』が有名ですが、吉川英治からの手紙もあります。皆さん誰もが知っている人として横山大観の手紙、高村光太郎からはがきもあります。民芸活動で有名な柳宗悦のはがき、彫刻家平櫛田中の手紙、洋画家美術家として有名な中川一政の手紙、歌人・書家として有名な秋艸道人（会津八一）の書もあります。版画で有名な川上澄生の作品もあります。

○信州関係

信州関係では、愛知県岡崎市出身で上田市に移住し美術の大衆化、民衆芸術運動に努めた山本鼎の手紙や、版画があります。現在の辰野町出身の中川紀元の手紙、萩原守衛と関係の深い戸張弧雁のはがき、窪田空穂の歌を彫った硯もあります。

これから図書館が中心になってじっくり整理、研究をしていく予定です。まだ未整理ですから、次に何時皆様にお目かけられるかわかりません。8日11時半から2時までですので、時間の都合がつけば見に来ませんか。ガラス越しでなく、有名人の筆跡や、美術作品を見ることのできる滅多にない機会です。学生さんにもお声をかけてください。

週刊信大 2010年8月2日号冒頭言

○石井鶴三の蔵書整理

信州大学附属図書館に寄贈された石井鶴三関係資料の内、図書の整理がほぼ終わりました。

石井鶴三という個人の教養を知る上で蔵書は大事です。しかしながら、単なる本ではありません。その多くに著者の献呈のサインがあるのです、それもとんでもない有名人の。石井鶴三がどのような人と交際していたかを、本も物語ってくれています。

禁帯出で、書庫の中に入っていますが、興味のある方は是非眺めに來てください。

○石井鶴三と信州大学

整理された中に、『石井鶴三先生語録』という106頁からなるガリ版刷りの本がありました。奥付はないのですが、「続あとがき」によりますと、昭和39年7月30日に信州大学教育学部附属長野小学校の田中高光・南島金平両氏が印刷して先生たちに頒布したようです。

文章は、彫刻家で碌山美術館の創建に尽力したことで知られる笹村草家人が直接耳に聞き止めたものを、『木曾教育』に発表したものです。

○縁と教育

「続あとがき」には、「私共としては長野美術研究会の一人として直接に制作指導や、美術教育者としてのあり方についてお教えいただいて来たということで、清澄なる戸隠高原において、石井先生などから教えられていることについて語り合い、われわれのつき当たっている基本的な問題についてじっくり考えることができるとすれば、喜びであります」と記されています。

石井鶴三から真摯に学び、教育に生かしていこうという意気込みが伝わります。

石井鶴三が長野県の美術教育に大きな足跡を残したことは有名ですが、附属小学校ともつながっていたことを知り、改めて本学と石井鶴三の縁を思いました。同時に私たちも教育者として先人たちの態度

に学びたいものです。

週刊信大 2010 年 11 月 8 日号冒頭言

○繊維学部 100 周年

去る 10 月 23 日に信州大学繊維学部の百周年の記念式典が行われたことは、記憶に新しいところです。学部の前身は上田蚕糸専門学校ですが、その初代校長が針塚長太郎先生です。校内にある先生の胸像（石井鶴三作）は、繊維学部の発展と式典を見て、さぞかし感慨深かったことと思います。

○針塚校長の胸像

鶴三が原形を作った最初の胸像（座像）は昭和 10 年 10 月 21 日に、創立 25 周年の記念事業として除幕されました。石井鶴三は前年に 1 月ほどかけて、校長室で小さな小型の座像と実大の胸像を作り、小型座像をもとに 180 センチ以上にもなる本制作を東京の自宅で行いました。なお、この時の胸像（石膏）は 9 月に開催された院展で大変な評判を呼びました。

残念なことに、初代の胸像（座像）は戦時中供出されましたので、院展での石膏をもとに昭和 26 年 10 月に再建されたのが現在の胸像です。

胸像にも大きな時代の流れが秘められています。

○石井鶴三展

本学に寄贈された石井鶴三関係資料は少しずつですが整理されていますので、附属図書館会議室で展示会を行います。彼のブロンズ作品の実物や写真、挿絵がいかにして作られたかの一環を語る尾崎士郎からの小説挿絵依頼状、さらには横山大観などのサイン本などが展示されます。

一般公開は 12 月 28 日日から 30 日までの 10 時から 5 時、本学の学生や教職員の皆様にはこのほかに 12 月 1 日から 3 日の 11 時から 2 時まで閲覧できるように致します。

せっかくの機会ですので、是非とも大学のお宝を見においでください。

参考文献目録

<石井鶴三本人の書籍> (刊行年順)

- 『石井鶴三素描集』（光大社、1930）
- 『石井鶴三挿絵集』第 1 巻（光大社、1934）
- 『凸凹のおばけ石井鶴三随筆集』（中島謙吉編、二見書房、1943）
- 『石井鶴三版画集』（形象社、1978）
- 『石井鶴三文集』1～2（形象社、1978）
- 『石井鶴三全集』第 1 巻～第 12 巻（形象社、1988）
- 『石井鶴三全集』別巻 1～2（形象社、1989）
- 『石井鶴三書簡集』1～3（形文社、1996～1999）
- 『石井鶴三日記』（形文社、2005）

<その他石井鶴三の関連文献> (刊行年順)

- 『宮本武蔵石井鶴三集』現代名作名画全集第1巻（六興出版社、1954）
東京芸術大学石井教授研究室編『荻原礫山増補版』（岡書院、1956）
上田彫塑研究会彫塑五十年記念誌特別委員会『石井鶴三先生』（小県上田教育会、1974）
笹村草家人「石井鶴三と藤村木彫」（『信濃教育』第765号、1950）
東京芸術大学石井教授研究室編『荻原礫山』（信濃教育会、1954）
『版画芸術 22 特集石井鶴三』（阿部出版、1978）
『石井鶴三展上田市制60周年記念』（上田市教育委員会、1979）
笹村草家人『笹村草家人文集』上巻（田中繁雄、1980）
板橋区立美術館編『回顧石井鶴三』（板橋区立美術館、1983）
石井蹊子編『山精石井鶴三資料集』（形象社、1983）
山梨県立美術館・三重県立美術館編『石井鶴三展生誕百年記念』（山梨県立美術館、1987）
『中川一政全文集』第2巻（中央公論社、1987）
原田実編著『石井鶴三』日本の水彩画3（第一法規出版、1989）
礫山美術館編『石井鶴三作品集』（礫山美術館、1992）
中川一政編『石井鶴三素描集』第1巻～第3巻（形文社、1992～1993）
『石井鶴三のすべて』（毎日新聞社、1994）
『中川一政挿画展 石井鶴三・木村莊八とともに』（中川一政美術館、1994）
『石井鶴三展』（小平市平櫛田中館友の会、1999）
茨城県近代美術館編『描かれた武蔵』（茨城県近代美術館、2003）
陰里鉄郎『陰里鉄郎著作集』第三巻（一艸社、2007）
『石井鶴三展 芸道は白刃の上を行くが如し』（松本市美術館、2009）